

視聴覚授業の新たな形態の模索 一日中のテレビ番組を用いたメディア・リテラシー向上の試み¹

李建華* 宮崎恒平**

A New Method on Listening Course Study

Jianhua Li* Kohe Miyazaki**

Abstract

Listening is an important course in foreign language study. However, there are few good Japanese teaching materials available since it involves comprehensive ability of listening and speaking. In this paper, the authors address the attempt to teach the course by comparing the elaborately selected TV programs which share the same topic from various Chinese and Japanese TV programs. The authors choose the TV materials on China-Japan diplomatic relations and East Japan Great Earthquake from NHK, BTV (Beijing TV) and CCTV (China Central TV). The purpose is not only to have students understand the content from language level, but also to educate them to analyze the difference and background of TV production between the two countries. It will be helpful to develop the habit of solving problems from various perspective and the ability of media literacy.

キーワード：視聴覚、メディア・リテラシー、日中、テレビ番組

一、はじめに

筆者たちは中国の大学で日本語を教えているが、これまで視聴覚の授業を長年担当してきた。中国の大学では「視聴説」という名前が一般的であるが、視聴覚授業は中級後期から上級の学習者、主に3、4年生を対象に行われている。この授業の目的は大きく分けて2つある。1つは言語習得で、もう1つは日本の社会や文化をよりよく理解することである。この授業では私たちを含め、多くの先生方が映像を使って、学生たちに聞き取り問題や内容要約などをやらせている。

このように、視聴覚の授業が、大学の日本語教育のカリキュラムにも組み込まれているが、他の科目との関連や日本語教育における位置づけが必ずしも明確ではない。例えば、文法、作文、聴解、会話などの科目は、学んだことを他の科目にすぐに応用できるので、それぞれの関連が比較的明確である。しかし、視聴覚授業は内容的には聴解と日本事情を合わせたような感じで、教師にとっても学生たちにとっても、他の科目の学習にどう応用していいか不明な点が少なくない。

* 基盤教育機構、** 北京理工大学外国語学院

授業で使われる教材についても、日本のドラマやニュース、日本語能力試験の問題集など、教師によってさまざまで、それは教師の裁量が大きいという利点もあるが、見方を変えると定評のある教材、テキストがあまりなく、他の科目との関連がそれほど明確ではないことが大きく関係しているのではないかと考えられる。

こうした中で、筆者たちは日本語教育における視聴覚授業の役割について改めて考え、教材を工夫することで学生たちの考える力を向上させることの可能性について注目した。

実際、私たちが教えている日本語学科の学生は日本語を習得するために、毎日一生懸命勉強していて、日本語は年々上達している一方、他の専門知識や自分で考える力についてはやや不足している感が否めない。そこで映像教材を使って物事を多角的に捉える力を鍛え、メディア・リテラシーを向上させることはできないだろうか考えた。メディアの特性を理解した上で情報を主体的に読み解き、活用する能力を身につけることは日中両国の相互理解に有益だけでなく、日々膨大な量の情報が発信される現代社会を生き抜く上で不可欠である。この試みはまだ実験的な段階ではあるが、今回の試みを通じて見られた学生たちの変化、授業の進め方や教材内容に関して明らかになった問題点、今後の課題などを今後の授業に生かしていきたい。

二、メディア・リテラシーとは何か。

「メディア・リテラシー(media literacy)」とは「メディアの読解能力」を意味する言葉である。

この概念は、国や地域によってメディアの発展状況や制度が異なるため、定義が統一されていないが、次のような意味を含むことは共通している。すなわち、「私たちの身のまわりのメディアにおいて語られたり、表現されたりしている言説やイメージが、いったいどのような文脈のもとで、いかなる意図や方法によって編集されたものであるかを批判的に読み、そこから対話的なコミュニケーションを創り出していく能力」²である。ここでいう「批判的」とは、日本語でいう「否定的に批判する態度・立場にある様子」といったネガティブな意味ではなく、「適切な規準や根拠に基づく、論理的で偏りのない思考」という建設的で前向きな思考を指している。

メディア・リテラシーは情報が氾濫する現代社会を生きていくために非常に重要なスキルとして、その習得と向上とを目的としたプログラムはカナダ・オンタリオ州で1987年、世界で初めて公教育に導入された。現在、カナダの他にイギリスやオーストラリア、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンなどのスカンジナビア諸国、オーストリア、ドイツ、フランスをはじめとするヨーロッパ各国、ロシア、ブラジル、チリ、南アフリカ、アジアでは香港やフィリピンなどで、メディア・リテラシーがカリキュラムに組み込まれている。アメリカでもほぼすべての州で同様のメディア教育が行われている。

しかも、カナダ、イギリス、オーストラリアなどの先進国だけでなく、チリ、南アフリカ、フィリピン、香港などの国や地域でも、メディア・リテラシーの育成や向上を目的とした授業を公

教育に導入している。日本でも2000年代以降、さまざまな科目で音声や画像等を用いた教育が実践されるようになった。国もメディア・リテラシーの向上と普及をめざし、総務省などではメディア・リテラシーを授業で扱うさいに便利な映像素材を作成し、貸出している。

中国ではメディア・リテラシーの概念自体がそれほど浸透しているとは言えない状態で、その習得と向上を目指した教育プログラムもほとんど行われていないのが現状である。

そこで、筆者たちは映像を使って物事を多角的に捉える能力を向上させる試みを、もう一步踏み込んでメディア・リテラシーの向上まで視野に入れてやってみることにした。

三、教材及び授業の進め方

次に、今回使った教材や授業の進め方について、具体的に説明していこう。

1、教材

今回の試みは、共通のテーマを扱った日本と中国のテレビ番組を学生に見てもらい、2つの番組の観点や見解の相違、さらに番組制作などの背景まで考えさせるというもので、2011年度の第2学期に、3年生の「日語視聴説」という授業の中で行った。

この授業は、2011年に北京大学出版社から出た徐曙の『日本語視聴説』をメインテキストにして進め、途中全16回の授業うち5回を使って今回の試みを行った。取り上げたテーマは「日中国交正常化」と「東日本大震災」で、それぞれ2012年の3月と5月に実施した。

具体的に使った映像素材であるが、日中国交正常化については日本NHK『歴史その時動いた300回 日中国交正常化』（2007年9月26日放送）と、中国北京衛星テレビBTVの『日本首相田中角栄決定訪華秘聞』上（2011年8月18日放送）と『日本首相田中角栄決定訪華秘聞』下（2011年10月3日放送）³である。

そして、東日本大震災についてはNHKスペシャルの『東北関東大震災から10日』（2011年3月20日放送）⁴と、中国中央テレビCCTVの『日本震后一月間』⁵を使ってみた。こうしたテーマを選んだ理由は、中国でも大きな話題となっており学生が強い関心を持っていること、また教師の専門に比較的近く、解説しやすいなどの利点があるからである。

ただし、「東日本大震災」については、日本の番組と中国の番組で放送時期が異なっている。日本側の材料は地震発生10日後に放送されたもので、中国側のは地震発生1ヶ月後に放送された内容である。進行中の出来事を追ったドキュメンタリーを比較する場合、本来、同じ時期に放送されたものを比較することが妥当であるし、地震発生1ヶ月後に放送されたNHKの番組もあったが、中国ではどうしても入手することができなくて、やむを得ずこの2つを教材にしたのである。

また放送時間についても、日中国交正常化は日本側、中国側、両方とも約45分であるが、東日本大震災は日本側、中国側、両方とも約2時間もあった。放送時間が違うので、実際の授業の進め方も日中国交正常化と東日本大震災では少し変えてみた。

2、授業の進め方

授業の具体的な進め方は学生の予習、学生の発表と教師の解説の三部分から成り立っている。

まず予習一として、学生たちには中国の番組と日本の番組をそれぞれ見てもらう。予習の段階で日中両国の番組の共通点や相違点などを意識しながら見ることに、さらにメディア・リテラシー向上まで視野に入れ、どうしてそのような共通点、相違点が生まれたのか、両国の番組制作にはどのような背景があるのかまで考えてもらった。

予習二としては、クラス全員を3つのグループに分けて課題を出し、分担して作業をさせた。具体的には背景知識や関連表現、重要表現を調べることに、与えられた範囲の字幕を作成することである。字幕の作成には、予習をきちんとしているかどうかを確認するという目的も含まれている。

そして、次は教室活動であるが、日中国交正常化は3回（1回100分、以下同）、東日本大震災は2回に分けて、基本的には、まず、クラス全員で鑑賞する、そしてグループ代表に発表してもらう。その後、他の学生からの質疑に応答してもらう。それから映像を見ながら学生たちが作成してきた字幕の正しさを確認したり、内容に関して教師が質問を出したり、教師が学生たちの調べてきたことを補足しながら解説したりした。

学生の発表でやや驚いたのは、彼らが作成した問題である。各グループは自分の担当範囲からクラス全員に向け、練習問題を作成していた。それは聞く前の時代背景及び人物紹介、単語練習問題と、聞きながら行う正誤判断と穴埋めの練習問題と、聞いた後に内容全体に対する理解確認や、感想を述べるなどの練習からなっている。これはもちろんメイン教材の構成からの影響が考えられるが、逆にいえば、学生は聴解の際、「ボトムアップ」モデルと「トップダウン」モデル及び相互交流モデルを意図的に応用しようとしていて⁶、聴解のストラテジー能力も鍛えられていたといえる。

今回の試みは、視聴覚授業を通じて学生たちの多角的思考力やメディア・リテラシーの向上をはかるというものであるから、学生たちが番組をどのように見て、理解したのかを確かめるために、彼ら一人一人に自分の意見を書いてもらった。これはこの論文の目的に関わる重要な点であるから、次に具体的に見てみよう。

3、学生の意見

まず日中国交正常化の回についてであるが、学生たちの意見の一部を挙げて紹介していく。「日中国交正常化の実現には多大な困難と努力があったのに驚いた」とか、「友好は日中両国のためであり、大事にしないといけないと真剣に考えた」、「昔も現在もいろいろな人が中日関係改善に貢献している。日本語学科の学生として努力したい」、なかには「迷惑スピーチと鼻血が面白かった」など、ユニークな指摘もあるが、ほとんどは「面白い」、「勉強になる」、「見てよかった」といったもので、考察というより感想といった方がいい内容がほとんどであった。しかし、なかには現在の日中関係まで考慮して、両国間で起こる衝突に感情的な態度で臨むのは意味がないことや、時には国際法に基づいて物事を処理する姿勢が重要であることを指摘した学生もいた。

これに対して、東日本大震災の回では、日本と中国それぞれの番組の特徴を意識しながら見た学生がほとんどであった。両国の番組の共通点や相違点については、共通点を指摘する学生はわ

ずかだったが、相違点はすべての学生が指摘していた。その指摘の多くは番組の構成や内容に関するもので、「日本の番組は二部構成だが、中国の番組は二つに分かれていない」とか、「日本の番組は福島原発事故だけでなく被災者たちの現状にも注目しているが、中国の番組は福島原発事故のみに注目している」、「原発事故に関して、日本の番組は東京電力や日本政府の責任を追及していないが、中国の番組は厳しく批判している」などのことを指摘していた。

中には、やや異なる視点から違いを指摘する学生もいた。例えば、時間配分の違いから、両国の番組の特徴を指摘した学生も数人いた。どの内容にどれぐらいの時間を使ったのかというのは違いを理解するためにも重要な視点である。他にも「原発事故の原因について、中国の番組は専門家が口頭で説明するだけであったが、日本の番組はパネルと模型を使って説明しており、視聴者にとってわかりやすい」とか、「日本の番組ははじめに短く静かな曲を演奏しながら白いタイトルを出すことにより、視聴者の心に深いショックを与える」など、演出の違いを指摘する意見もいくつかあったの。

今回はメディア・リテラシーの向上も視野に入れた試みということで、日中両国の番組の背景や文脈まで考えてもらったが、日中国交正常の回と比べると、きちんと考察している学生が多かった。中国の政治体制や中国本国への警鐘、放送時期の違い、報道の仕方など、さまざまな観点から興味深い考察を示してくれた。学生たちの考察の一部を原文のままピックアップして紹介していこう。

例 1

「日本と違って、なぜ中国側は政府行動に対する関心度がこれほど高いのか。その原因は、中国の政治の特徴に関係があるからだと思う。世界の政治大国である中国の立場から見ると、国家の大事に対応する時、政府機能は最も重要なものだ。被災者たちと国民の気持ちを落ち着けるために、政府は災害に直面する責任を引き受けなければならない。番組の違いが存在する原因は両国の国情が違うからだと思う」

これは学生が中国の政治体制に注目していることが分かる。

例 2

「全体的に言えば、日本のほうはより感性的で積極的に感じられる。それに対して、中国のほうは理性的で批判的に感じられる。

中国は傍観者としてより客観的に事故を見るのは当然のことであるが、原発事故の悪影響に注目して日本政府や東京電力の責任を追及するのは本国を警告するためだと思う。中国の近代化は日本と似ていると言われているから、事故に対する予防や対処は中国にとって非常に貴重な経験である。向いている対象が違うから、それぞれ強調する内容も違う。日本の番組は日本人、特に被災地の人に生き続ける希望と自信を持たせて未来へ歩むのが一番重要な目的である。一方、中国の番組にとっては、日本の事故を通して国民に関連知識を普及させること、中国に有益な経験を吸収することが大事なことである」

以上の例 2 は、中国本国への警鐘という観点から、番組の目的まで考察しているといえる。

例 3

「違うところがあった原因について、私は放送時期と番組の立場に関係があると思う。日本の番組は震災からわずか 10 日後であったが、CCTV の番組は震災から一ヶ月後であった。震災から 10 日後は、震災による各影響がまだ把握されにくく、いろいろな情報がまだ出てこなかった。特に原発事故はまだ終結しておらず、全体の情勢は不明となっていた。そのため、日本の番組の報道範囲は比較的限られている。震災から一ヶ月後は大震災全体に対する情報やデータがより多くなり、客観的に把握しやすくなった。そのため、CCTV は情報の量がより多く、報道範囲も比較的広がった。

また、NHK は日本のテレビ報道局なので、民衆に客観的な情報を伝えるだけでなく、むしろこの番組を通じて大きな痛手を被った日本人の不安な気持ちをできるかぎり解消するつもりであった。それゆえに報道も主観的な色彩が濃い。CCTV は外国のテレビ報道局であり、情報を伝え、分析することを唯一の目的としている。そのため、報道する立場が比較的客観的であると思う。マクロの視点から全体的に事態を把握することを重視している」

例 3 の学生は、放送時期の違いが番組の内容に与える影響に注目していることが明瞭である。

他にも報道の仕方の違いなど、さまざまな観点からそれぞれ興味深い考察を示してくれた。中国人ということで日本の事情よりも中国の事情の方が詳しいこともあるか、中国の番組制作の背景について詳しく述べたものが多かった。

四、おわりに

最後に、今回の試みの結論と今後の課題について考えてみたい。

今回、同じテーマを扱った映像教材を用いることで、視聴覚授業でも多角的思考力の向上を促すことが可能であることを確認できた。3 月の日中国交正常化の時は学生たちの意見も感想レベルのものが多く、日中の立場や番組制作における観点の違いを指摘できた学生は少数であった。しかし、それでも内容をきちんと理解した上で、自分の考えを述べようとする姿勢を確認することはできた。それが 5 月の東日本大震災の時にはほとんどの学生が日中の番組の特徴や観点の違いをきちんと指摘できた。視点もさまざまで、学生たちが日中の番組の共通点や相違点を意識しながら見ていたことは明らかである。

しかし、メディア・リテラシーに関しては、視聴覚授業でその向上が図れるかどうかはまだ不明な点が多い。観点の違いを明らかにした上で、その違いの背景について考察するというのは、ある程度の知識量と思考力が要求される作業である。それゆえ、日頃どれぐらい物事を多角的に捉えているか、物事の背景まで考える習慣が身についているかどうかによって、学生の間でも大きな差が出てくる。実際、何人かの学生たちは日中国交正常化の回でも東日本大震災の回でも、興味深い考察を発表してくれたが、半数以上の学生は背景の考察にまで至らず、日中の番組の違いについての簡潔な感想を述べるにとどまっていたのである。

そして今回の試みを通じて、3 つの大きな課題が明らかになった。

まず、第一は、教材をどのように確保するかである。同じテーマを扱った日本と中国の番組というのは、それほど多くない。それをどう確保するか。また放送時間についても、今回の東日本大震災の番組は2時間近くあったが、予習の際の学生たちの負担や、授業での時間配分を考えると、1時間以内のものが望ましいと考えられる。例えば、同じテーマを扱った2つの映像にこだわらなくても、ニュースの特集などで、見る者の意見がはっきり分かれるような事象を扱った映像は比較的入手しやすく、放送時間も5分から15分程度のものが多いので、工夫すれば教材として使える可能性が大きい。

そして次の課題は、回数である。今回のような試みが学生の多角的思考力の向上に有効であるとしても、日本語教育における視聴覚授業はあくまで言語習得が最も重要である。それ故、何度も練習しなければ能力の向上が望めないことや練習すればするほど能力が向上していくことは理解しながらも、限られた授業数をこのためだけに使うことは困難である。今学期は全15回の授業のうち5回をこの試みに使ったが、これは十分な回数とはいえないが、学習効果と言語習得の両立を考えた場合、6回で3つのテーマを扱うのが限度ではないかと考えている。

最後は、他の科目といかに連携していくかということである。日本語教育の場で学生たちの多角的思考力やメディア・リテラシーを向上させようとする場合、何度も練習する必要があるが、先ほども述べたように、それほど多くの授業を割くことは不可能で、限られた授業数でこうした取り組みを有効なものにするためには、視聴覚授業だけで完結するのではなく、他の科目との連携が必要になってくる。例えば、閲読や日本事情などの科目は協力しやすく、3つの科目が同じテーマを扱った教材を用いることで学生たちの学習効果はさらに上がると考えられる。また他の科目との連携は、日本語教育における視聴覚授業の位置づけや他の科目との関連をより明確にすることにもつながっていくと思う。

他にも、予習の段階で教師はどこまで関与すべきか、予習問題はどれくらい出すべきかなど、課題は多いが、こうした課題は今後の取り組みの中で少しずつ解決していけたらと考えている。

1 本論文は2012年名古屋大学で行われた日本語教育国際研究(ICJLE2012)大会で発表した内容を修正し、作成したものである。

2 吉見俊哉『メディア文化論 Invitation to Media Cultural Studies』p 256-257 有斐閣 2004年

3 中国北京衛星テレビ BTV『日本首相田中角栄決定訪華秘聞』上、2011年8月18日放送、44分

(<http://tv.sohu.com/20120113/n332110291.shtml>)

中国北京衛星テレビ BTV『日本首相田中角栄訪華秘聞』下、2011年10月3日放送、44分

(<http://tv.sohu.com/20120116/n332332132.shtml>)

4 NHK スペシャル「東北関東大震災から10日」2011年3月20日放送

(http://www.tudou.com/programs/view/914Bba_tKWU/)

5 中国中央テレビ CCTV「日本震後一月間 1」2011年4月11日放送

(<http://bugu.cntv.cn/specials/C27380/classpage/video/20110411/101277.shtml>)

中国中央テレビ CCTV「日本震后一月間 2」2011 年 4 月 11 日放送

(<http://bugu.cntv.cn/specials/C27380/classpage/video/20110411/101244.shtml>)

もともと 1 つの番組だが、インターネット上では 2 つに分けられている。

6 第 2 言語習得過程において、入ってくるインプットを言語知識を使って意味に変えていく際、単語のような小さい単位から段落や文章のように大きな単位へと理解を積み重ねて全体の意味を構築していくのは「ボトムアップ」で、逆に文脈・場面をてがかりに背景知識を使った予測や推測を行いながら理解を進めることを「トップダウン」という。国際交流基金『日本語教授法シリーズ 第 5 巻「聞くことを教える」』p15-21、株式会社ひつじ書房、2008 年

参考文献

1 徐曙、毛文偉他編集『日本語視聴説教程』（一、二）、北京大学出版社、2010—2011 年

2 尹松『中国の大学における日本語の聴解指導に関する実証的研究』、上海訳文出版社、2005 年

(平成 25 年 3 月 31 日受理)